

書評

〔評者〕
平田幸一
獨協医科大学神経内科教授



臨床てんかん next step

知的障害・自閉症・認知症から併発精神障害まで

(『The Neuropsychiatry of Epilepsy, 2nd ed』Michael R. Trimble, Bettina Schmitz 編著)

吉野相英 監訳

立澤賢孝, 戸田裕之, 角田智哉 訳

●B5 頁248 2013年

定価：本体5,800円＋税

[ISBN978-4-88002-745-6]新興医学出版社刊

神経内科医,あるいは神経学者の精神医学的関心の高まりはてんかんにかぎったことではない。多くの神経疾患で同じように精神医学の役割が増している。学習障害における神経遺伝学的発見や自閉症における中枢神経系異常の発見によって、神経学と精神医学の境界領域はさらに拡大し、同じものを両者がみていることに当然のことながら気づき始めた。本書にあるように同じことが学習障害や自閉症を併発したてんかんにもいえる。

てんかんに精神病が生じることは以前から知られてはいたが、その生物学的基盤が受け入れられるようになったのは内側側頭葉てんかんと扁桃体や海馬などの辺縁系の関連や統合失調症のつながりが明らかとなり、重要な病態と考えられるようになったことが背景として考えられる。こうした進歩によって、てんかん併発精神障害の神経解剖学的あるいは神経化学的基盤の理解が促され、わが国では歴史的にもともと精神科医がみていたてんかん患者を欧米でも神経内科医よりも精神科医になじみのある向精神薬で治療を受ける人も増えてきている。

本書はそのタイトルのとおり、てんかんに関わるさ

まざまな精神医学的問題を扱っている。本書はてんかん併発精神障害の疫学に始まり、発作間欠期不快気分障害、発作周辺期精神症状、発作後精神病などのてんかんに特異的な精神障害だけでなく、てんかんを併発することの多い知的障害、自閉症、認知症についてもそれぞれ独立した章を設け、詳細に解説している。てんかん治療における精神医学的問題も取り上げないわけにはいかない。さらに、本書では最新の抗てんかん薬の副作用情報も更新しているが、現在きわめて重大な問題となっている自殺も取り上げている。さらに、側頭葉てんかんの外科治療に伴う精神医学的問題についても情報を満載している。本書はこれまでに類書のない、まさに臨床てんかん next step である。

最後に、監訳者の吉野相英教授についてであるが、先生は博学でこの分野の第一人者であるのはもちろんであるが、その性格は温厚かつ親しみやすく万人受けする人格の持ち主である。てんかんに関わるさまざまな精神医学的問題を扱う本書の訳者としてまさに適任者であると思うのは小生だけではないのではなかろうか。